

寺院 > 観世音寺 >

観世音寺の文化財

観世音寺創建時からのものは、ほとんどありませんが、国宝梵鐘をはじめとして、平安時代・鎌倉時代の仏像など多くの貴重な文化財が残されており、そのいずれもが重要文化財に指定されています。

○宝蔵の数々の仏像(重要文化財)

観世音寺の宝蔵には、かつて観世音寺の観音堂と阿弥陀堂に祀られていた仏像が収蔵されています。ここでは、いくつか代表的な仏像について紹介します。

ふくうけんじやく

・不空罽索観音立像

観世音寺に残る仏像の中でも、最も大きなもの

▲ 不空罽索観音立像全体

(写真提供: 太宰府市史編纂室)

で、高さ517cmもの巨像です。クスノキ材の一木式の構造ですが、頭部を前後二材矧ぎとし、内刳をほどこし、肩・肘・手首からつないでいます。頭上に仏面と10の化仏をのせ、顔は3つの眼を持ち、理智的な引き締まった印象をうけます。この像は、解体修理の際、胎内銘文及び納入品が発見されました。それによると前の像は塑像(土をこねて造った像)で承久3年(1221年)7月の夜、突然に倒れ、こわれたので、翌年に木彫で再興したと記されています。その時再興されたのが、この像です。

(福岡県教育委員会「福岡の文化財」ホームページより)

また、江戸時代、この観音像は観世音寺の名のごとく観音堂に祀られていましたが、寛永8年(1631年)の大風で観音堂は倒壊しましたが、観音像だけは倒れず人々を驚嘆させたという逸話も残されています。

(太宰府市「太宰府市史 民俗資料編」より)

・阿弥陀如来坐像

この像は、かつて阿弥陀堂(現在の金堂)に本尊として安置されていたもので、クスノキの寄木造、像高220cmの大像です。全体の造りは定朝様に共通したもので、平安後期の作を示しているとされています。像容が自然で、円満な顔、流麗な衣文等当時の全国を風靡した和風の仏像です。研究者間では諸資料から大治年間(1126～1130年)に馬頭観音と同時期に制作されたと考えられています。昭和32年(1967年)の解体修理の際、元禄2年(1689年)の修理銘とその時納入された阿弥陀経10巻が発見されました。

▲ 阿弥陀如来坐像(写真提供: 太宰府市史編纂室)

▲ 阿弥陀如来坐像部分

・大黒天立像

大黒天は古い形として、三面六臂の忿怒像と、武装して甲をつけ手に袋を持つ像がありますが、近世になって俵に乗って大きな袋をさげたいわゆる「大黒様」が有名です。寺では僧が食事をとる食堂に安置することが多かったようです。

像高172cm、クスノキの一木造で、内刳のない丸彫りのまま足まで造ってありましたが、両足は後補で継ぎ足しをしています。髪をさかまく忿怒の姿、衣文をほとんど彫らない彫口等、古い感じがありますが、穏やかで軽やかな印象は、古い大黒天が、豊穡の神である大黒様に移りかわる過渡期的のもので、平安時代後期の作品と考えられています。この時期、大像の作例はなく、全国でも貴重な像として知られています。

閉じる